

国語学研究①

キリシタン語学

に16
おけ世

●松岡洸司—著

キリシタ 語学

—16世紀における—

江苏工业学院图书馆
藏书章

国語学研究①

ゆまに書房

◇著者略歴

松岡 洸司（まつおか・こうじ）

1941年（昭和16年）福岡市に生まれる。

上智大学文学部哲学科卒業後，同大学文学部
国文学科卒業。

上智大学大学院文学研究科国文学専攻博士課
程終了。

現在，上智大学文学部教授，国文学科長。

国語学研究①

キリシタン語学

——16世紀における——

平成三年十一月 十五日 印刷

平成三年十一月二十五日 発行

著 者 松岡 洸司

発行者 荒井 秀夫

発行所 株式会社 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一 セントラル大手町
電話〇三（三三九二）〇七九八（代表）
振替東京四一六三二六〇

印刷所

製本所

株式会社 常川製本
コウヨウ企画印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替え致します。

ISBN4-89668-517-2 C3387

序

キリシタン語学の研究を始めてどれほどの年数が経ったのであろうか。余り気がつかないままに現在に至っている。大学に勤めている限り、毎日の雑用に追われるのは確かであり、その他に、学部で講義と大学院での講義が大切な要素として含まれている。その雑事の中で研究することを教えて下さったのが、恩師森岡健二先生であった。研究するのがあたりまえであるから、授業のことはごく普通で、より一層あたりまえであると教えられた時は、胸に痛いものを感じた。

雑事と研究の中に生れたのが、私のライフワークであるキリシタン語学の研究ということになる。

大学院時代には、「サルバトル・ムンヂにおける語彙研究」として修士論文を構築した。博士課程では「コンテムツス・ムンヂの語彙研究」を志した。この二方向に関しては、今回の『キリシタン語学』には掲載せず、次回の研究でまとめる予定である。この論文は未刊のままになっているので、いずれ出版の機会を得たいと思う。

本書『キリシタン語学』は二部に分けてあり、一部は国語史の流れである。

「アルバレス・ラテン文法書における日本語研究」は大学院時代の論文で、上智大学に「キリシタン文庫」があり、その一冊を調べているうちに研究課題となったものである。試行錯誤ということばがあるが、この頃、資料を検討しながらない頭をひねったもので、東洋文庫に、英訳本のイソホのファブラス（伊曾保物語）の中国版や、コンテムツス・ムンヂの中国版（輕世金書）を採し出したのもなつかしい思い出となっている。

大学で講義を担当し、国語学特殊講義をもち、授業を進めていくうちに、アルバレス・ロドリゲス・コリヤー・オヤングレンという異国からみた日本語研究という流れを知り、それ以降の文典にもなんらかの影響を与えたということも考えてきたが、その基礎として、第一期キリシタン時代、第二期蘭学時代というのがあり、やはり、キリシタン語学のあとに蘭学研究が行われてきた事実をみなければならなかった。また、第三期の広義の洋学についても検討する必要があった。

一部では、「アルバレス・ラテン文法書における日本語研究」(昭51・1「国文学論集」9号)、その後、ローマイエズス会文書館で筆写したアルバレスのラテン文典の中国版について、「アルバレス・ラテン文典とその時代——中国版の位置——」(昭61・8「キリスト教文化研究所紀要」5)として発表。キリシタン時代の日本語の文法書は、ロドリゲスの日本大文典・小文典、コリヤードの日本語文典、オヤングレンの日本文典と続いているが、「中世期の日本文典」(昭54・1「国文学論集」12号)を研究し、ラテン文典が与えた影響と日本語について考察した。さらに「オヤングレンの日本文典の一側面」(昭56・1「国文学論集」15号)において、メキシコで刊行された不思議な日本文典について発表した。他に、「ロドリゲス『日本大文典』における接続詞考」(昭62「上智大学国文学科紀要」4)、「キリシタン時代の品詞分類——形容詞観について——」(「国文学科紀要」1)、『ドチリナキリシタン』の文体」(昭63「キリスト教文化研究所紀要」7)の試論を発表した。「翻訳法と語との連関性」(昭60・1「国文学科紀要」2)はアルバレスのラテン文典に記載された日本語をたよりにしていくと、翻訳の一つのパターンを発見するというもので、翻訳書『コンテムツス・ムンヂ』・『バレット寫本』をもとにして

翻訳法と語との連関性を考察した。さらに「日本語の語彙体系の中の洋語——中世末のキリシタン書を参考に
して——」（昭60・9「日本語学」）では、語彙体系の中の外来語の位置をキリシタン版の側からデータを出し、
現代との対比を試みたものである。

二部においては、語彙と意味を取りあげた。大学院時代、語彙の考察がやはり、昭和42年頃、語彙の問題につ
いて国語学会のフォーラムが阪大で行われ、刺激を受け、それ以来語彙の問題が私のテーマとしてあり、その試
論をくりかえしてきた。語彙には意味とのかかわりがあることは自明であるが、この延長について、二部で考案
することになる。

「羅葡日対訳辞書の語彙と意味」（昭63・9『キリシタン研究』28輯 吉川弘文館）では、羅葡日対訳辞書の語
彙を考察するのに、その中に出てくる日本語の語彙を中心に意味分類を行い、各分野の意味を検討した。「羅葡
日対訳辞書が羅西日辞書に与えた影響——語彙の面からの考察——」（昭61・6『キリシタン研究』26輯）は語
彙の影響関係を取扱ったもので、「日葡辞書の語彙の意味分析——体言について——」（昭63・1「国文学科紀
要」5）は日葡辞書の見出し語は日本語であり、それにつけられている語訳の意味の問題を取扱ったものである。
「日葡辞書の語彙の意味分析——用言・副用言について——」（平成元・1／平成2・1「国文学科紀要」6／
7）も意味の分析を行ったものである。ついで「日葡辞書の語彙の意味変化」（平成3・1「国文学科紀要」8）
は日葡辞書の語彙のうち漢語・和語が現代語との対照でどのように意味変化を行ったかを考察した試論である。
「言語と文化受容の変化」（平成2・1「キリスト教文化研究所紀要」9、平成3・1同）は言語と文化受容とい

う観点から検討したもので、（統）の方も、外来語と翻訳の問題を取りあげた。「キリスト教の伝来と宗教用語——バレット寫本・聖經直解を中心として——」は16世紀の聖書翻訳に現れた宗教用語がどのように変遷したかという論文である。次の『バレット寫本』と『聖經直解』の対照と語彙」は二本の文献の宗教用語の対照を行ったものである。

以上に収められた論文以外のものは、次の機会にまとめたいと思うが、今日まで継続して研究できたことをふりかえると、森岡健二上智大学名誉教授から賜った学恩とひとかたならぬご指導に対し、心から謝意を表すものである。またゆまに書房の社長、荒井秀夫氏の推めもあり、出版できたことに感謝する次第である。編集に際し、校正その他で労をおかけした奥寺純子氏に、真壁隆治氏からは索引作りの助言、索引に関しては、事項を担当した上智大学大学院博士後期課程の武居聖子氏、人名に関しては大学院前期課程の岡村正章氏に心からお礼を申しあげたい。

平成三年十月

松岡 洸司

キ
リ
シ
タ
ン
語
学
・
目
次

第一部 国語史の流れ

アルバレス・ラテン文法書における日本語研究……………	1
アルバレス・ラテン文典とその時代——中国版の位置——……………	35
中世期の日本文典——ラテン文法の日本語への適用を巡って——……………	49
オヤングレンの日本文典の一側面……………	89
ロドリゲス『日本大文典』における接続詞考……………	115
キリシタン時代の品詞分類——形容詞観について——……………	137
『ドチリナキリシタン』の文体……………	151
翻訳法と語との連関性……………	173
日本語の語彙体系の中の洋語——中世末のキリシタン書を参考にして——……………	197

第二部 語彙と意味

羅葡日対訳辞書の語彙と意味……………	225
羅葡日対訳辞書が羅西日辞書に与えた影響——語彙の面からの考案……………	253
日葡辞書の語彙の意味分析——体言について……………	273
日葡辞書の語彙の意味分析——用言について……………	299
日葡辞書の語彙の意味分析——副用言について……………	325
日葡辞書の語彙の意味変化……………	353
言語と文化受容の変化……………	381
言語と文化受容の変化（続）……………	405
キリスト教の伝来と宗教用語——パレト寫本・聖經直解を中心として……………	429
『パレト寫本』と『聖經直解』の対照と語彙……………	457

*

人名・事項索引……………1

アルバ レス ラテン文法書における日本語研究

序

アルバレスの文法書は、キリシタン語学書の系列では、一般にラテン文典といわれ、一五九四年に天草で出版された天草版である。⁽¹⁾

標題は、最初のページの upper 段に、ハイエズス会のマヌエル・アルバレスの「文典」三卷、動詞の活用に、日本語の説明を加う V とあり、中央にイエズス会の紋章、下段に上長の認可のもと・イエズス会天草学院・一五九四年 V とある。

本書はラテン語を学習する者のための文法書であるが、文法書の序文の後に続く「注意」を読むと、この文法書の性格が一層明瞭になる。その注意書きの大意は、⁽²⁾

ラテン語法の働きを、日本で勉強する人にとって、このマヌエル・アルバレスの文法書は必要なものである。日本人の人々はラテン語の説明について、ポルトガル語の動詞の活用がわからないので、日本語の言葉でしらせ

た。
となっていて、ラテン文法を学ぶ日本人のために書かれた文法書であることが明らかである。
さらに注意書きには、

註は、ラテン語を教える人たちのもので、説明するための解釈である。ラテン語と日本語の言葉の意味がさらにわかりやすくなるためである。

とあって、ラテン文法を教える教師の参考になることもあわせて配慮されている。

この文法書の構造を示すと、三巻から成り、内容は、次のとおりである。

第一巻 語形変化

2 丁 69 ウ

序

2 3 ウ

一、名詞屈折論

3 ウ 12

二、動詞活用論

12 ウ 69 ウ

第二巻 話しの八品詞あるいは要素

70 137

一、各品詞

70 77

二、各品詞の句構成

77 ウ 137

第三巻 音節の側面

137 ウ 170 ウ

右のうち、第一巻の語形変化の項では、特に注意書きの趣旨を生かして、ラテン語で、ラテン文法を説明するとともに、文例・語例として日本語（ローマ字）で例をあげているのが特徴として見られる。

さて、この天草本は原著アルバレスの文法書にもとづいて、日本語の説明・註が、動詞の活用を中心にして施されているが、原著は、ラウレス著『吉利支丹文庫』⁽⁵⁾によれば、「一五七二年から一八三九年の間に数多く版を重ねた」ものである。一五八五年版の原著と比較してみると、この天草本はアルバレスの文法書に従い、説明・

註を附加しながらも、原著の抄本であることに気づく。

さて、ポルトガル語の説明は、ラテン語と同じように活用が並べられ、時々ポルトガル語で用例が述べられているが、文法書の中では、もっぱら日本語の動詞の活用の説明、ならびに註がひととき目立ち、ポルトガル語は、ポルトガル語を解する学生の便を考慮してつけ加えてあるにすぎない。

そのころのラテン語教育の実態を見ると、日本耶穌会目録⁶（文祿元年、一五九二年）の、天草のコレジョ（学校）とノビシアド（修練院）の人名簿に、

ニコラ・アピラ 西班牙人、拉丁語第一級の教師、日本語を普通に解す。

マヌエル・バレット 葡萄牙人、拉丁語第二級の教師、日本語をよく解し、日本語にて説教す。

と二人の神父のラテン語教師の職名が掲げてある。すでに、ラテン語教育が進められ、日本人学生では、第一級のラテン語学生（五名）、第一級のラテン語を学びつつある学生（九名）、第二級のラテン語学生（八名）⁷、ラテン語を学び、現在日本の文字及び書物を学びつつある学生八名、と書かれていて、かなりの学生がラテン語を学習していたことがわかる。さらに長崎の近郊、トードス・オス・サントスの教会では、三木・パウロ「日本人・学生にして説教者、ラテン語を少しく学びたり」とあるように、すでにラテン語を学んだ人もいた。

次に、一六〇六年の耶穌会目録を一見すると、有馬のセミナリオのラテン語の教師として、すでに日本人名がのっている。

イルマン・デオエゴ結城⁽⁸⁾

イルマン・ドラド・コンスタンティノ

ラテン語の教師

さらに、一六〇七年二月作製のノビシアド（修練院）には、日本人修練士一四名にまじって、二人のポルトガル人修練士の名前が見られる。外国人も、日本人と同様に日本でラテン語を学んでいることが理解されよう。

アルバレスの文法書は、一貫した会議方針の結果、必要にせまられて日本で出版されたもので、西洋の印刷機をもたらししたイエズス会の巡察使ワリニャーノの功が大きい。一五八〇年（天正八年）イエズス会の教育機関であるセミナリオ・ノビシアド・コレジヨを創設し、その教育機関で使用される教材については、日本で出版する急務を説いたのである。⁽⁹⁾ とりわけ出版されたアルバレスの原著は、長年イエズス会の「ラテン語教育」の規範とされたもので、それが日本語の例文を加えて、日本で出版された意義は大きい。

最後にアルバレスについてふれると、彼は、イエズス会著述図書⁽¹⁰⁾（一六七六年）に、ポルトガルのマデイラ島出身で一五二六年に生れるとある。一五四六年、二〇才の時イエズス会に入会し、その人格の高潔さと賢明さの点で特に優れていたもので、コインブラ学院の院長、次いでエボラ学院、その後リスボンの院長にもなった。もっぱらポルトガルで活躍し来日したことはなかった。一五八二年、エボラで死去、とりわけ古典に通じ、ラテン文典⁽¹¹⁾三卷（一五七二年）は、当時のヨーロッパのイエズス会のコレジヨで、ラテン語文法を教授する教科書として広く用いられた。

第一章 名詞の屈折

アルバレスの文法書の場合、標題に書かれた「動詞の活用¹²に日本語の説明がつけ加えられている」ということに捉われて、名詞のことを忘れがちであるが、文法書の3丁裏から12丁表までは、名詞の屈折について述べられていて、最初にまず名詞の屈折が、日本語（ローマ字）と対照させて説明される。その内容は、次のとおりである。

助詞をつけた名詞 Dominus (あるじ)

第一変化 Musa (ムーサ、芸術) f ※ f (女性名詞)
の女神

第二変化 Dominus (主人) m m (男性名詞)

” Templum (神殿) n n (中性名詞)

第三変化 Sermo (話) m 訳は、田中秀央編・羅和

” Tempus (時間) n 辞典で統一。

” Parens (父、母) f・m

第四変化 Sensus (感覚) m

” Cenu (膝) n

第五変化 Dise (日) m

「ラテン語の格に相当するのが日本語の助辞と一緒にある名詞¹²」とある部分は、ラテン語の名詞の屈折を、「日本語名詞十助辞」という関係で捉えた最初の文法ということになる。

ラテン語名詞については、格（主格・属格・与格・対格・呼格・奪格）、数（単数・複数）、性（男性・女性・

中性) による屈折が問題になるが、日本語の説明は名詞の項の最初に掲げており、ポルトガル語は附加されては
 ない。Dominus (あるじ) の屈折例を掲げると次のとおりである。

格

ラテン語屈折

日本語訳

Nominativo (主格)

Dominus

あるじ、あるいは、あるじは、が、の、より。

準 Genitivo (属格)

Domini

あるじの、が。

数 Dativo (与格)

Domino

あるじに、へ。

Accusativo (対格)

Dominum

あるじを。

Vocativo (呼格)

o Domine

あるじ、あるいは、いかにあるじ。

Ablativo (奪格)

a Domino

あるじより、から、に。

ラテン語主格単数に対して「あるじ・あるじは・が・の・より」(日本語訳はローマ字で書かれているが、以下
 歴史的かなづかいで翻字して示す) という文節の形をあてはめていったことがわかる。「あるじ」は助詞がつか
 ず、詞単独で主格になる文節である。「が」は、口語文法であらわれる格助詞で主格であることを示し、「あるじ
 は」「あるじの」も主格を表わしているが、「あるじより」は少くとも日本語では、「主格」とはいいがたい。し
 かし、格助詞「より」は比較の基準を示し、たとえば「鉄は金よりも有益である」という日本語は、ラテン語に
 すると「金より」の金は主格となる。⁽¹⁾それで「金より」という文節を主格の項に置いたとも考えられる。次に
 「の」にあたる格が、属格といわれ、「の・が」の格助詞を正確にあてている。「に」にあたる格は与格で、格助
 詞「へ」も使用できる。対格は「を」にあたる格で、呼格は呼ぶときに使う。ここでは「あるじ」と呼ぶときと

「いかにあるじ」と呼ぶときの二例をあびてある。舊格は「いから何かを奪った」ことを示すので、「より・から・に」は妥当な格助詞である。

格	ラテン語屈折	日本語訳
Nominativo (主格)	Domini	あるじたち, あるいは, あるじたちは, が, 等。
複 Genitivo (属格)	Dominorum	あるじたちの, が。
数 Dativo (与格)	Dominis	あるじたちに, へ。
Accusativo (対格)	Dominos	あるじたちを。
Vocativo (呼格)	o Domini	あるじたち, あるいは, いかにあるじたち。
Ablativo (奪格)	a Domini	あるじたちより, から, に。

右は複数形における対照表で、ラテン語主格複数に対して、「あるじたち・あるじたちは・が」というように接尾辞をつけた語を文節にととのえて単数同様に示している。「の・より」は省略されているが「等」とあるから、含まれているという意味であろう。他の格も、呼格を除いて、それぞれの文節の形をあてはめている。ラテン語名詞は、格により屈折しているが、それぞれの格を日本語でも格表示の文節の形で置き換えしていることが理解される。日本語は助詞によって屈折し、対するラテン語は数・性の語尾変化で屈折する。その格を、日本語の格助詞を中心として、文法の成分でもって置き換えたところにすばらしい点を発見する。また、複数の場合、「あるじたち, あるじたちは・が」というように「たち」という接尾辞をつけて、単数と区別している。そして註には、